



小さいほうも取り外します

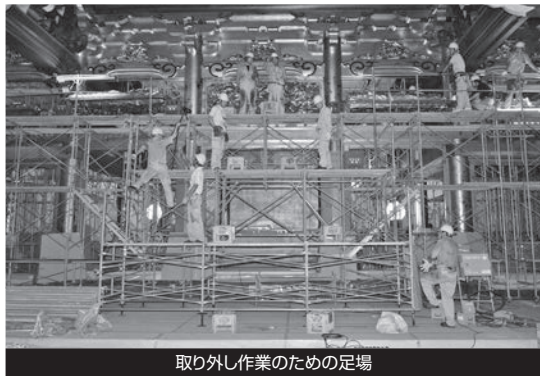
※2手挟：本堂から正面に突き出た部分(向拝)の柱(向拝柱)の上部で、垂木の勾配によって生じた三角形の空きを埋めるためにはじめたものと考えられ、しばしば彫刻が施されている。

※1髹股：社寺建築などで梁や桁の上に置かれ、構造的には上の荷重を支えるためにある。装飾的な面もあり、意匠的にも工夫がこらされている。

框の部分は、金箔が剥がれ落ちた箇所新たに施し、金具を梅酢洗浄により美掃していき、明治度の再建当時の輝きを取り戻します。



鳳凰や草花が精緻に彫刻されています



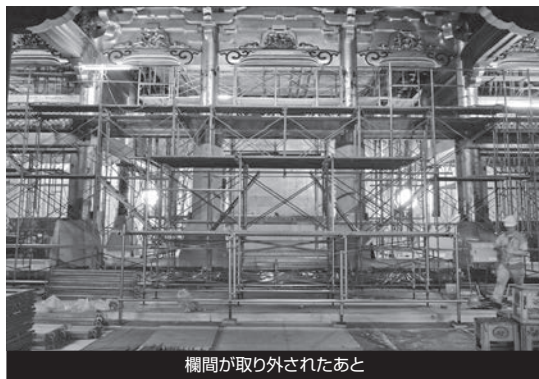
取り外し作業のための足場



取り外された小欄間



皆で巨大な欄間を取り外します



欄間が取り外されたあと



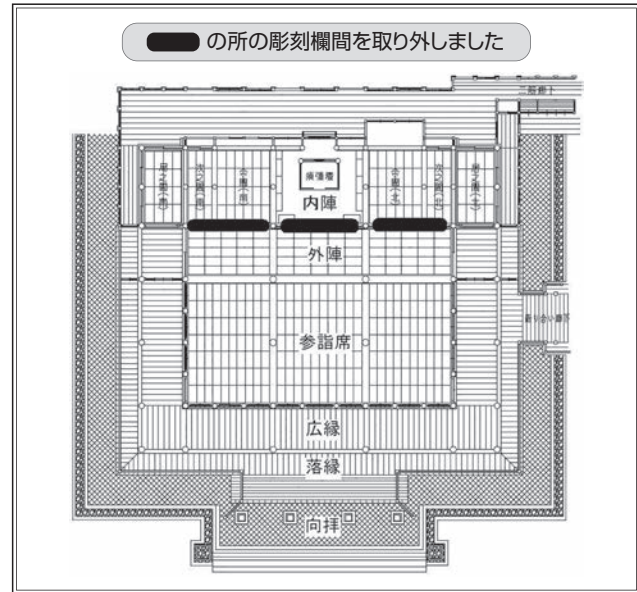
# 御修復のあゆみ く 伝承された先達の願い く

## 阿弥陀堂の欄間工事

御影堂・阿弥陀堂には内陣と外陣の境の欄間をはじめ、髹股(※1)や手挟(※2)などに繊細な彫刻が施してあります。欄間は、天井と鴨居または内法長押の間に設けられた開口部に小障子・組子・板などを嵌めこんだもので、採光と通風の機能と装飾を兼ねたものです。これら「彫刻欄間」は、一般的には厚板に彫刻を施したもので、さらにそこに極彩色を施したのも見受けられます。図様は多岐にわたり、松・竹・梅・牡丹・かきつばた・おもだか・藤など植物をモチーフにしたものや、鶴・孔雀・揚羽蝶など動物をモチーフにしたものまで幅広く意匠化されています。

阿弥陀堂に使用されている彫刻は植物を題材としたものが中心で、実在する花木草木ばかりです。なお動物では向拝上部に龍、虎、参詣席と広縁とを境にする扉の上部には十二支、広縁脇の障子廻りに雉・山鳩・鳩・鶴と実在の鳥類を意匠したものを用いられています。阿弥陀堂の内陣と外陣との境の上部にある欄間には、鳳凰や雉などが彫刻されており、小さいもので縦が約八十cm、横が約二・八m、大きいもので縦が約一・四m、横が約三・三mもあります。これらの欄間は「付け彫り」と呼ばれる彫刻方法が用いられており、各部分に分けて彫ることによって彫刻に細かさや立体感が作り出されています。また用材には欄間の枠となる框の部分には檜が、彫刻部分には漆が塗られ箔押しされているため正確なことはわかりませんが、檜か松が使われているようです。

内陣・外陣美掃工事では、それらの巨大な欄間の取り外しが行われました。着工当初は取り外しが不可能と思われていたため、阿弥陀堂内部で足場を組んで修繕・補修を予定していました。ところが間近で工事をしつつ調査を進めたところ、明治の阿弥陀堂再建時に取り付けられた当時の手順を推定することができ、欄間を取り外せることが判明。これにより足場を新たに組み足し、内陣と外陣の境にある巨大な欄間を丁寧に取り外す工事が行われました(下図参照)。欄間を取り外せたことで細部にわたる修復が可能となり、より質の高い修復を行うことができました。



今後の修復では、彫刻部分は著しい損傷が見られなかったため、主に刷毛などを用いて表面に付いた汚れや埃を取って美掃を行います。また